文部省著作

高等小學讀本

六

發行所　日本書籍株式會社

廿六八

K1
M

国立国語研究所
72433
図書館

文部省著作

高等小學讀本

六

發行所　日本書籍株式會社

明治四十五年二月十一日大正七年八月廿九日

華洲藏書

河北藏書

目錄

第一課　動物と植物との關係……一
第二課　わが國の農業……五
第三課　船津傳次平……十二
第四課　人力車の發明……十六
第五課　なぼれおんのろしや遠征……二十
第六課　太陽ト月……二十六
第七課　望遠鏡と顯微鏡……三十三
第八課　ぴらみっど……三十七
第九課　すたんりーりびんぐす（一）とんのゆくへをさがす（一）……三十九
第十課　すたんりーりびんぐす（二）とんのゆくへをさがす（二）……四十三
第十一課　熱帶植物……四十八
第十二課　ころんぶす（一）……五十三
第十三課　ころんぶす（二）……五十七
第十四課　ころんぶす（三）……六十一
第十五課　ないやがら瀑布……六十五
第十六課　地震……六十八
第十七課　忘れがたみ（一）……七十二
第十八課　忘れがたみ（二）……七十七
第十九課　手紙……八十一
第二十課　外交……八十四

○公書ノ字
（ヽ）コレハ字ノ方

第一課　動物と植物との關係。

春、野原を散歩してみると、花のあたりに、蜂、蝶（ちょう）、花虻（はなあぶ）などの、多くの昆虫が集ってゐて、花の中に、頭を入れて、蜜を吸ひ、花粉をからだにつけて、花から花へ、いそがしさうに飛んでゐる。昆虫は、かうして、植物から、その好きな食物をとり、植物は、動物によって、その花粉を他の花に傳達することができるのである。

秋、林の間を散歩してみると、木の枝に、種々の鳥が來ては、美しく熟してゐる果實を啄（ついば）んで飛んで行く。鳥類は、からして、植物の、うまい果實を食ひ、植物は、動物によって、その種子を、四方に散布することができるのである。

動物と植物とが、生存上、密接な關係をもつてゐることは、この、一二の例でも明かであるが、こゝに、人の見ることのできないところに、大きな關係のあることがある。

すべて、動物は、呼吸作用によつて、空氣中の酸素を吸ひ、これを、體内で、炭酸がすとして吐き出すものである。炭酸がすは酸素と炭素とが化合してできるもので、ひとり、動物や、その他、一般生物の呼吸作用によつてできるばかりでなく、物の燃燒するときや、腐敗するときや、その他、種々の原因からもできるが、動物の生活には、はなはだ、害のあるものである。それで、もし、この炭酸がすを消費するものがないならば、いかに、全地球をおほつてゐる空

氣でも、歳月を經るにつれて、炭酸がすを含む比例が、いちじるしく增してきて、地球上の動物は、つひには死滅すべきはずである。しかるに、空氣中の炭酸がすの分量は、平均すれば、一定の比例をたもつてゐて、動物が、無事に成長し、蕃殖することのできるといふのは、炭酸がすが、水中にとけ去るばかりでなく、植物がこれを消費するからである。

植物は、呼吸作用によつて、動物と同じく、酸素を吸ひ、炭酸がすを吐き出すものであるが、その作用は、動物のほど盛でなく、したがつて、吐き出す炭酸がすの分量も、あまり多くはない。しかるに、植物には、他に、きかんに、炭酸がす

を取り、酸素を放つ、特別の作用がある。この作用は、同化作用といって、植物體の綠色の部分、ことに、葉面にある氣孔によって、炭酸がすを取り、その葉綠體の中で、日光の助を借りて、この炭酸がすを分解して、酸素を放ち、炭素を取り、それから、大切な食物をこしらへるのである。それで、もし、この炭酸がすを供給する途がないならば、歳月を經るにつれて、空氣の炭酸がすを含む比例は、いちじるしくへってきて、地球上の植物は、つひには枯死すべきはずである。しかるに、植物が、思ふがまゝに成長し、繁殖することのできるといふのは、炭酸がすが、絶えず供給されるからで、これを供給するのには、他に、種々の原因

があるが、動物の呼吸作用も、あづかって、力あるものである。

今、金魚を細口の瓶に入れて、一二日も、水を取代へないでおくと、金魚は、つひに死んでしまふ。これは、水中にとけてゐる酸素が吸ひつくされて、呼吸に適しないようになるからである。しかるに、もし、その中に、青々とした水草を入れておくと、水を取代へないでも、金魚は、わりあひにながく生きてゐる。これは、前に述べたよーな關係が、瓶の中の金魚と水草との間に行はれるからである。

第二課　わが國の農業。

太古は、人口、はなはだ少く、人智も、また、きはめて進まぎりしがゆゑに、人々は、あるひは、魚貝を捕へ、あるひは、鳥獸を獵し、洞穴(ほらあな)などを住居として、その生を送りたりき。しかるに、年をふるにしたがひ、人口、やうやく增加し、自然に生ずる物のみにては、不足を告ぐるにいたりしかば、人々は鳥獸を飼養し、ついで、植物を栽培して、衣、食、住の材料を得ることを工夫するにいたれり。これ、すなはち、農業の起原なり。」

されど、當時の農業は、その方法、はなはだ粗略にして、穀草の栽培のごときも、わづかに、種子をおろして、その成熟を待つにすぎず、肥料を施すがごときことは、さらに、

知るものなかりしがゆゑに、地力、しだいに衰へて、收穫、やうやく減ずるにいたれば、さらに、新地を開墾(かいこん)して、これに栽培する有樣なりき。しかるに、人口、ますます增加して、かゝる方法にては、多數の人口をまかふることあたはざるにいたりしかば、つひに、その方法を改良し、品質よき産物を、多く出すことを工夫するにいたれり。現今、文明國の農業は、じつに、かゝる狀態にあるなり。

わが國は、古來、「瑞穗(みづほ)の國。」と唱へられ、氣候溫和、地味肥沃にして、きはめて、耕種の農業に適せるがゆゑに、漁獵とともに、耕種の農業を行ひ、穀草、ことに、米、麥の栽培は、もつとも早くより開けたり。

現今、わが國の耕作地は、臺灣をのぞきて、およそ五百萬町歩あり。これに栽培するもの種々なれども、米、麥はその大部分を占め、米の作付反別は、およそ二百萬町歩、その收穫は、年々、およそ四千萬石にして、麥の作付反別は、およそ百八十萬町歩、その收穫は、年々、およそ二千萬石なり。わが國の米は、品質、こと に優等なれば、ひろく、世人の嗜好に適せり。

養蚕も、また、早くより開け、今、なほ、ますます盛におもむけり。繭の取入高は、年々、およそ二百五十萬石にして、繭より製する生糸は輸出品の首位を占め、その價額、年々、およそ七千萬圓におよぶ。また、茶も、盛に栽培せられ、そ

の輸出價額、年々、八九百萬圓におよぶ。

わが國の農業中、もっとも開けざるは家畜の飼養なり。西洋諸國にては、いっぱんに、穀草、牧草などの栽培と、家畜の飼養とをあはせ行ひ、栽培によって得たる收穫は、多く、家畜の飼料に供すれども、わが國にては、古來、家畜を飼養することはなはだ少く、したがって、とくに、家畜の飼料に供するがために栽培するものきはめて少し。これ、わが國は、四面、みな、海に沿ひ、魚貝類の供給ゆたかなれば、國民、いっぱんに、これを食して、鳥獸の肉を食することの少きと、主として、耕種の農業と、養蚕とを行へるがために、衣服の原料を綿、麻、または、繭（まゆ）にもとめて、家畜の毛にも

とむることの少きとによる。

要するに、わが國の農業は、いまだ、現今のまゝにては滿足すべからず、ますく發達せしむべきこと多し。耕作地の面積廣大なるがごとくなれども、わが國總面積の、約一割五分にすぎずして、多くの西洋諸國が、その總面積の二割乃至五割なるに比すれば、なほ、はなはだ狹小なりといふべし。われらは、荒地を開墾して、ますく、美田、良圃を增加せざるべからず。また、穀草の收穫多量なるがごとくなれども、農夫の中には、なほ、舊來の栽培法を固守し、ただ、氣候の和順を賴むもの多し。われらは、學理を應用して、栽培法を改良し、ますく、收穫を增加せ

ざるべからず。ことに、家畜の飼養は、前にいへるがごとく、もっとも開けざるがゆゑに、原野、海岸を利用して、大いに、これを盛にせざるべからず。これを盛にして、善良なる耕作用の牛馬、健全なる、軍用の馬匹、滋養に富める乳、肉などを供給することは、じつに、今日の急務なり。

世には、農業をもって、賤しき職業のごとく思へるものあり。これ、大いなる誤解なり。農業は、われらが生活に必要なる材料を作り出す業にして、じつに、諸職業の本源なり。しかのみならず、農業に従事するものは、多く、野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、四肢の運動よろしきにかなふがゆゑに、身體、つねに健全にして、長壽を保つこ

とを得べし。わしんとんが「農は、人の職業中、もっとも健全、もっとも高貴にして、また、もっとも有益なるものなり。」といへるはうべならずや。

第三課　船津傳次平。

近世の老農の中にて、技倆、功績の、もっともすぐれたるものは船津傳次平なり。當時は、學理、いまだ開けず、老農と稱せらるゝものも、手加減と目分量との經驗を賴とするのみなりしに、傳次平はこれを不可なりとして、實驗に加ふるに、學理をもってし、大いに、農事の改良を唱へ、あまねく、全國をめぐりて、いたる所、農業者のまどひを解き、わが國の農事をして、しだいに、改良の道に向はしめ

たり。

傳次平が、はじめて、世に知られしは、駒場農學校、すなはち、今の東京帝國大學農科大學の新設せられし時なり。そのころ、農事改良の先導者たるべき農學者は、おほむね、年、なほ若く、實地の研究、なほ足らざりしかば、一人として、傳次平の指導を仰がざるはなかりき。されば、學理と實驗とを和して、わが國農事の發達のもとゐを開きたるは、じつに、傳次平の力なりといふべし。

傳次平は、天保三年、上野の國勢多郡富士見村に生れたり。幼き時より、父の教訓を守りて、みづから、鋤、鍬をとりて、耕耘、栽培に從事せり。また、餘暇には、父につきて、和漢

の學と數學とを修めしが、數學には、ことに熟達したりき。傳次平が世の老農と異なる根柢は、じつに、こゝにあるなり。傳次平は、みづから求むるにはあらざりしが、その名、しだいに揚りて、村民の、大總代名主たらんことを請ふことしきりなりしかば、辞することをえずして、つひに、その職に就きたり。かくて、その村を治むることは、なはだ親切なりしかば、村民、みな、その德に服しき。時の内務卿、大久保利通これを聞き、あげて、駒場農學校の農場監督の事を嘱託し、かつ、廣く、全國農事の改良のことにあたらしめたり。これ、明治十年のことにして、傳次平が四十六歳の時なり。

駒場の野は、もと、地味惡しく、惡草はびこれる所にて、その開墾、きはめて困難なりしが、傳次平の技倆と熱心とは、つひに、この荒野を化して、良圃となしたり。

この後、傳次平は農商務省に奉職し、さらに、農事試驗場に轉じて、技師に任じ、正七位に叙せられ、年來の功によりて、藍綬褒章を賜はりたりずでにして、故郷に歸りし後も、なほ、農事に力をつくしたりしが、明治三十一年、六十六歳にて死せり。

傳次平、人となり勤勉にして、業に倦まず、勞を厭はず、栽培、養蚕のことより、盆栽、割烹などのことにいたるまで、一として、精通せざるはなかりき。その講話を筆記した

るもの、または、印刷したるものは、人々爭ひ求めて、研究に資せり。

第四課　人力車の發明。

人力車は、明治の初年、高山幸助、和泉要助、鈴木德次郎らが、はじめて製造したものである。

しかし、そのころの人力車は、現今用ひてゐるような、完全なものではなくて、ただ、輦臺の上に、四本の柱を立て、その左右と後とに、簾を下げ、蓋を設けて、それに車をつけたものであった。そして、雨降などには、油紙などをおほって、やうく、それを凌ぐのであったが、その後、内田勘左衛門が母衣をつけることを工夫し、秋葉大助が、さらに、種

種の改良を加へて、つひに、現今用ひてゐるようなものになったのである。

秋葉大助は東京の人である。はじめ、武器、馬具の製造に従事し、諸大名の屋敷に出入してゐたが、明治の初年、はじめて、西洋から、馬車を輸入してきたので、機敏にも、これを買ひ入れて、乗合馬車の營業を開き、多くの人夫を雇って、東京と川崎との間を往復した。しかるに、まもなく、人力車が發明されて、大いに、世に行はれきたうなのを見て、きらに、業を轉じて、大きな人力車製造場を開き、多くの職工を雇って、盛に、その製造に従事した。

そのころ、輦臺の上に、四本の柱を立てることは、すでに

改良されて、今のよーな箱とすることとゝなったが、大助は、ますく、車體の改良をはかって、まづ、馬車にならって、蹶込(けこみ)を設け、ついで、車體の動搖を少くするために、車軸の上に、ばねをつけ、乘ごこちをよくするために、車體の内側に、布や革(かは)を張るなど、大いに輕便にして、實用に適するよーにした。

さて、大助はこれに人を乘せ、みづからひいて、東京と川崎との間を往復して、その工合を試み、かたはら、世人の注意をひくなど、熱心に、その流行をはかったので、それを用ひるものが、しだいにふえてきた。また、大坂にも、支店を設けて、その製造品を販賣させてゐたので、それを用

ひるものが、關西地方にもふえてきて、製造がまにあはないくらゐであった。

それから、年を追って、ますます流行してきて、今では、どんな山間でも、いやしくも、道路の通じてゐる所には、ほとんど、これを見ない所はないくらゐになった。ただに、國内ばかりではなく、東洋の大都會、開港場などには、これを用ひない所はないほどである。

今の世に行はれてゐる交通機關は、多く、外國人の工夫し たものであるが、この人力車ばかりは、わが國人の工夫したものである。もとより、進んだ工夫ではないが、明治の初年の工夫としては、注意すべきものといはなけ

れば、ならない。

第五課　なぽれおんのろしや遠征。

なぽれおんは、西暦千七百六十九年、地中海中のこるしか島に生れぬ。ふらんすに、革命(かくめい)おこりたるとき、革命黨(かくめいとー)にくみして、しばゝく、大功を立て、二十七歳のとき、いたりやくを征し、ついで、えじぷとを征して、ともに、大勝をえたり。なぽれおんの威名、これより、大いにあがりて、三十歳のときには、第一統領(りーとー)となり、三十五歳のときには、つひに、皇帝の位につきたり。

それより、なぽれおんは、大いに、諸國を征せしが、みな、その鋒先にあたることあたはず、あるひは、領土を割き、あ

るひは、王位を譲り、あるひは、同盟國を組織して、その保護をあふぐにいたれり。かくて、よーろっぱ全洲の權力は、二三の國を除きては、ほとんど、その手に歸し、なぽれおんの威勢はその極度に達したり。しかるに、ある、意外の敗亡より、その運命、にはかに一轉せり。意外の敗亡とは何ぞ。ろしや遠征の不結果これなり。

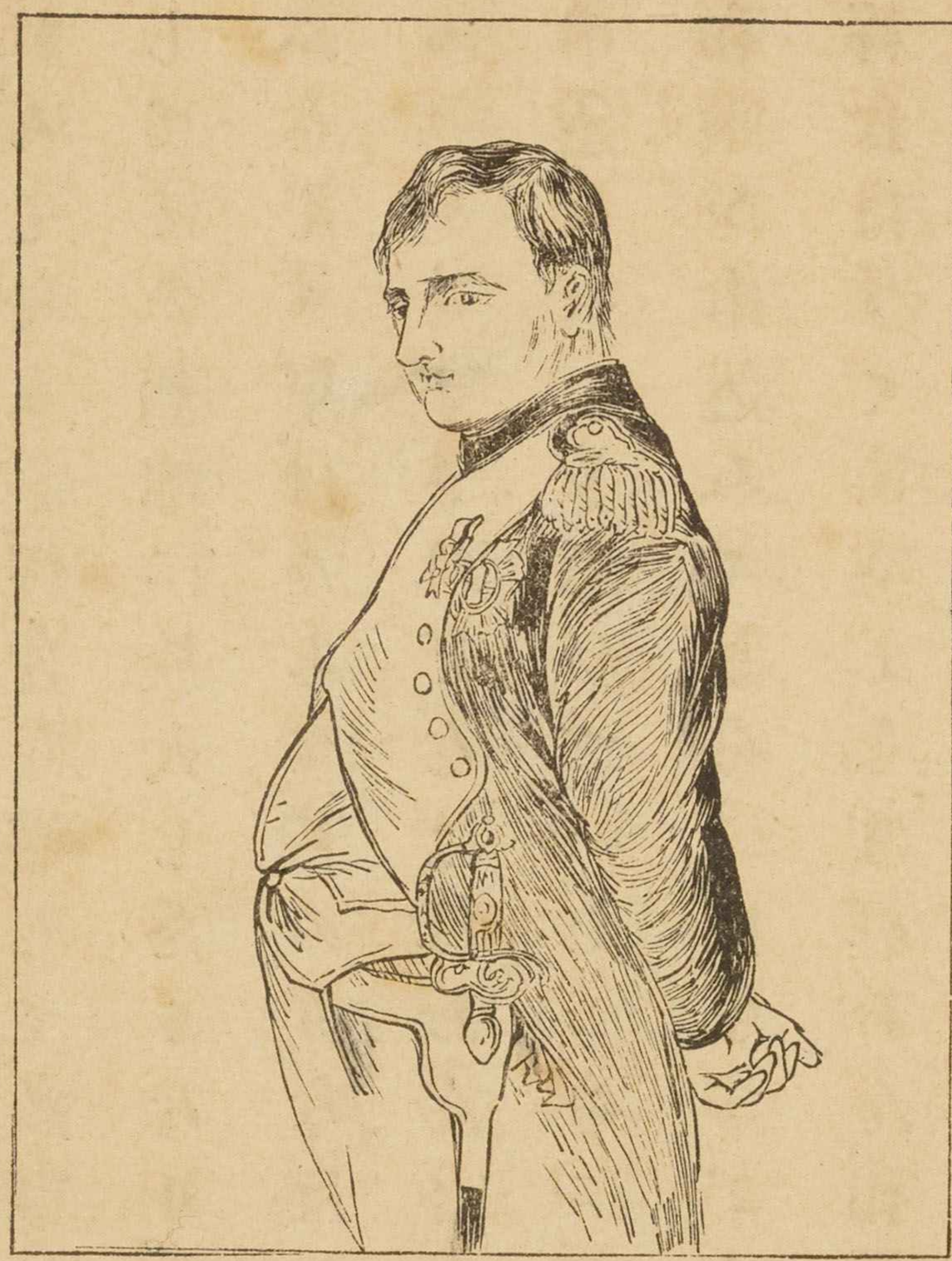
これよりさき、なぽれおんは、強敵、いぎりすを苦めんとし、大陸諸國に命じて、これと交通を絶たしめたり。ろしや、また、これを盟ひぬ。しかるに、まもなく、この盟を破りし、かば、なぽれおん、大いにいきどほり、西暦千八百十二年五月、兵四十五萬をひきゐて、ろしやのもすこー市に

向ふ。ろしや軍これをむかへ撃ちて、利あらず。されど、隊伍を乱さずして、もすこーに退けり。なぽれおんこれを追ふ。

九月十四日、もすこー市の尖塔（とー）、圓閣、宮殿など、はるかかなたにそびゆるを望めり。なぽれおん、喜んで、「壯麗なるもすこー市、まさに、わが手に落ちんとす。」といふ。すでに、その市にいたれば、全市、三十萬の民、去って、影を留めず、街路寂莫（せきばく）たり。全軍、事の意外なるにおどろく。なぽれおん本陣を、くれむりん宮殿におき、全軍を分ちて、市内の各所によらしむ。

その夜、市内に、火起れり。されど、大事にいたらざりしが、

翌夜、また、所々に起り「をりから吹き出でたる烈風のために、やうやく、各方へもえひろがり、紅炎天を焦して、猛火全市を包みたり。崩るゝ物音、はじくる響、人の叫びわめく聲と合して、慘狀(さんじょう)いはんかたなし。」ふらんす軍、必死となりて、消防につとむれども、「風、ますく烈しく、火、ますく盛にして、くれむりん宮殿、また、火の近づく」ところとなりぬ。」なぽれおん、



走って、市外に出で、ぺとろぶすきー宮殿にとどまる。延焼四晝夜、一萬二千戸を燒き盡して、火、はじめて消えぬ。これ、ろしや人が、糧食を盡して、敵軍を苦めんとし、意を決して、その舊都に放火したるなり。

ふらんす軍、はたして苦めあり。なぽれおん、今は退軍せざるべからず。されど、なぽれおんは、ろしや皇帝の和議を申込むべきを思ひて、いたづらに、日をすごし、みづから、和議を申込みて、さらに、日をすごせり。季は嚴寒に入り、糧食は、すでに空し。なぽれおん、和議の成りがたきを見て、十月十九日、つひに退軍す。從兵、わづかに十二萬人。ろしや軍、勢をつくして、これを追ふ。ふらんす軍の死傷、

はなはだ多し。されど、退軍の困難、きまではなはだしからざりしが、十一月七日、恐ろしき大吹雪ありて、道路の方向、地勢の險易、さらに知るべからず、凍死、餓死、戰死、あひつぎ、殘兵三萬人にすぎざるにいたれり。しかも、ろしや軍の追擊は、ますます急なれば、「なぽれおんは、つひに、殘兵をすて、そりに乘りて、ばりーに急行せり。

なぽれおんの運命は、「この意外なる」敗亡によりて、全く一轉し、諸外國は、さらに聯合して、ふらんすにせまれり。

「なぽれおん」これに敵するあたはず、つひに、帝位よりおとされて、こるしか島の東なるえるば島に流されたり。かくて、こゝにあること十箇月、ふたゝび、ふらんすに入

リて、皇帝となりしが、西暦千八百十五年、わーてるろーの戰に大敗し、また、帝位よりおとされて、大西洋中のはなれ島、せんとへれなに流されたり。かくて、こゝにあると六年、年五十三にて死せり。

第六課　太陽ト月。

太陽ト月トハ、ソノ大キサ、ホトンド、アヒ等シキガゴトク見ユレドモ、ジツハ、大イニ異ナリ。太陽ノ直徑ハ三十五萬里餘ニシテ、地球ノ直徑ノ、オヨソ百九倍アレドモ、月ノ直徑ハ八百八十六里餘ニシテ、地球ノ直徑ノ、オヨソ四分ノ一ニスギズ。シカルニ、カク、アヒ等シキガゴトク見ユルハ何故ゾ。コレ、太陽ハ地球ヲサルコト、平均、オ

ヨソ三千八百萬里ノ遠キ所ニアレドモ、月ハ平均、オヨソ九萬七千八百里ノ所ニアレバナリ。今、一時間三十マイルノ速度ヲ有スル汽車ニ乗リテ、太陽ヲ一周ストセバ、ジツニ、十年餘ノ長キ日月ヲ要スベシ。ソノ大ナルコト、推シテ知ルベシ。

太陽ハ非常ノ高溫度ヲ有スル火球ニシテ、強キ光ト熱トヲ、地球ニ送ル。コノ光ト熱トハ、ワレラノタメニハ、キハメテ重要ナルモノニシテ、モシ、コレナキトキハ、地球上ノ生物ハ、一日モ生存スルコトアタハザルナリ。

月ハ冷却シハテタル球ニシテ、弱キ光ヲ、地球ニ送ル。サレド、コノ光ハ、月ノ、ミヅカラ發スルモノニハアラズシ

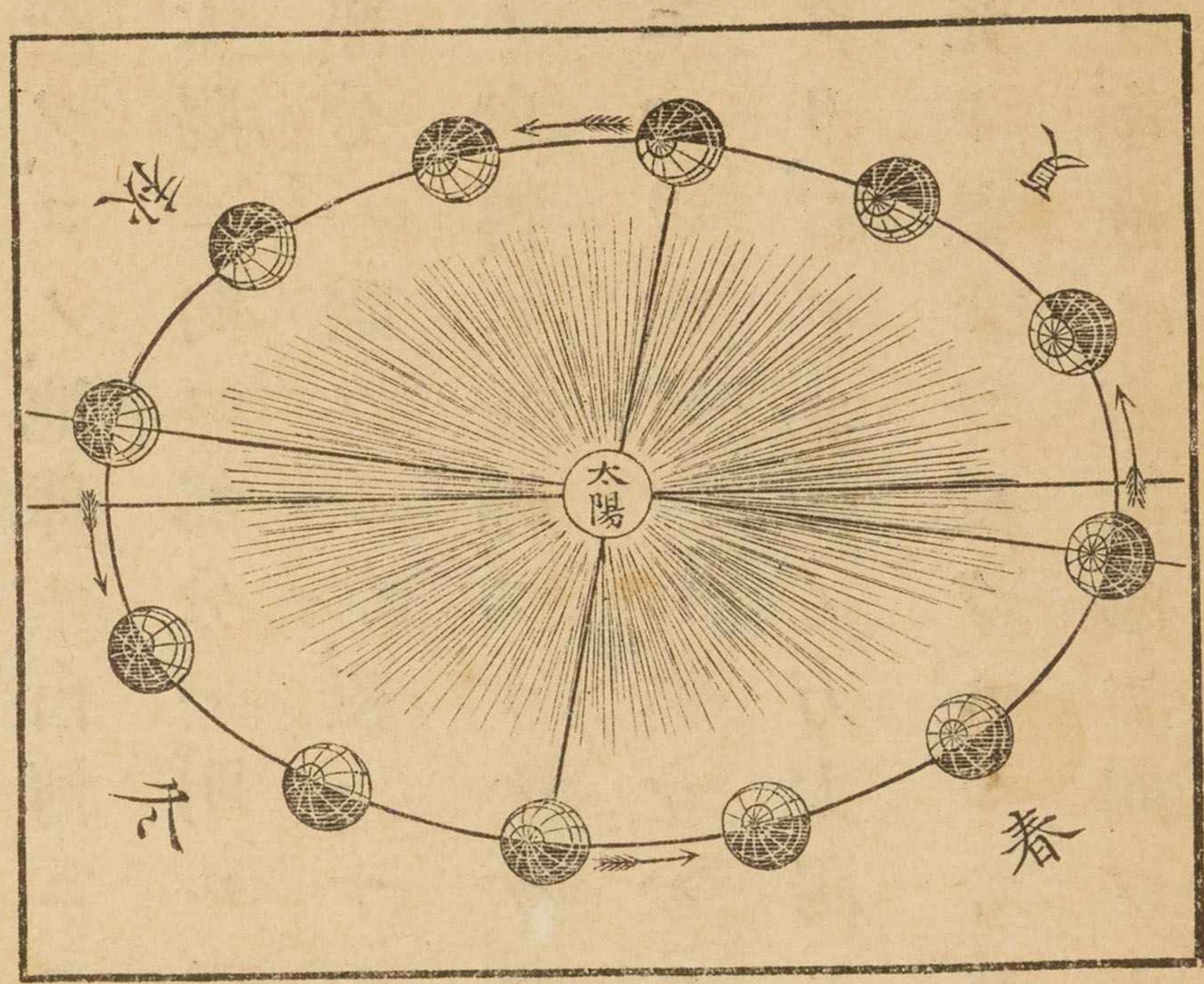
テ、太陽ヨリ受ケタルモノヲ反射スルモノナルガユヱニ、ソノ強サ、太陽ヨリ、直接ニ來ルモノトハクラブベクモアラズ。

月ハ、天體中、モットモ、地球ニ近キモノナルガユヱニ、ソノ表面ハ、スデニ、ヨク觀測セラレタリ。表面ニハ、噴火口ノ跡トモ見ユルクボミアル、アマタノ、高キ山アリ、平野ト思ハル、所モアレドモ、水モナク、空氣モナク、シタガッテ、生物ノ生存スルコトナシ。

ワガ地球ハ太陽、月ト密接ナル關係ヲ有ス。晝夜ノ別、四季ノ變化ハ、太陽トノ關係ニヨリテ生ジ、月ノ盈虧（ミチカケ）、日蝕（ニッシック）、月蝕（ゲッシック）ハ、太陽、月トノ關係ニヨリテ生ジ、マタ、潮ノ滿干（ミチヒ）ハ、

オモニ、月トノ關係ニヨリテ生ズ。

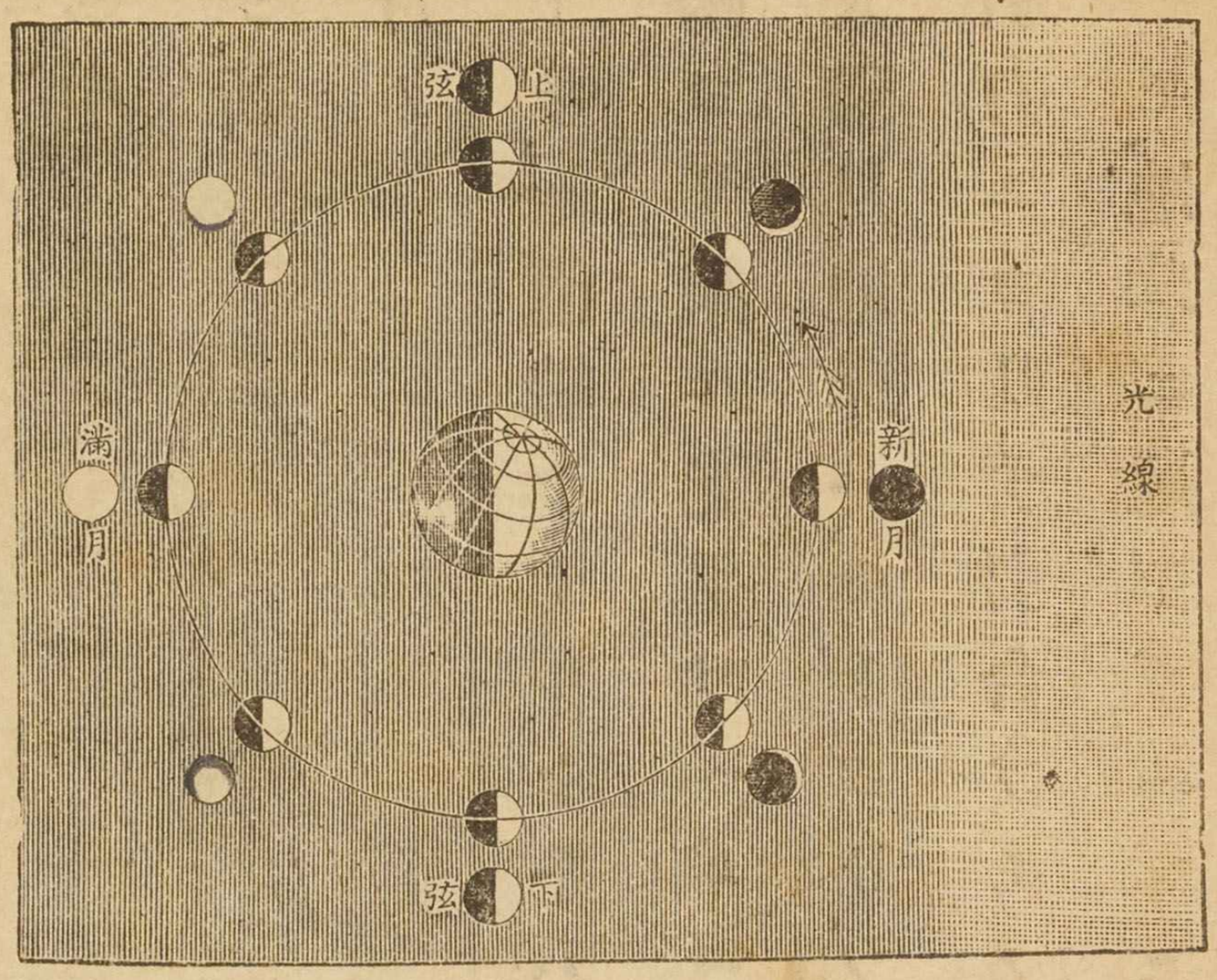
地球ハ、一日ニ一回自轉シツヽ、ホトンド一定セル軌道（キドー）ヲ作リテ、一年ニ一回、太陽ノ周圍ヲ公轉ス。晝夜ノ別ハ、全ク、コノ、地球ノ自轉ニヨリテオコル。スナハチ、地球ノ太陽ニ向フ部分ハ明ルクシテ、晝トナリ、コレニソムク部分ハ暗クシテ、夜トナル。マタ、四季ノ變化ハ、地球ノ自轉スル軸、スナハチ、地軸ノ、軌道面ニ垂直ナラザルニヨリテオコル。スナハチ、地球ノ太陽ヲ公轉スルニアタリ、ソノ北極ノ方太陽ニ向フトキハ、北半球ハ、太陽ノ光ト熱トヲ受クルコト多キガユヱニ、暑クシテ、夏トナリ、南極ノ方太陽ニ向フトキハ、北半球ハ、太陽ノ光ト熱



トヲ受クルコト少キガユヱニ、寒クシテ、冬トナルナリ。春ト秋トハ、ソノ中間ノ時ニシテ、氣候溫暖ナリ。

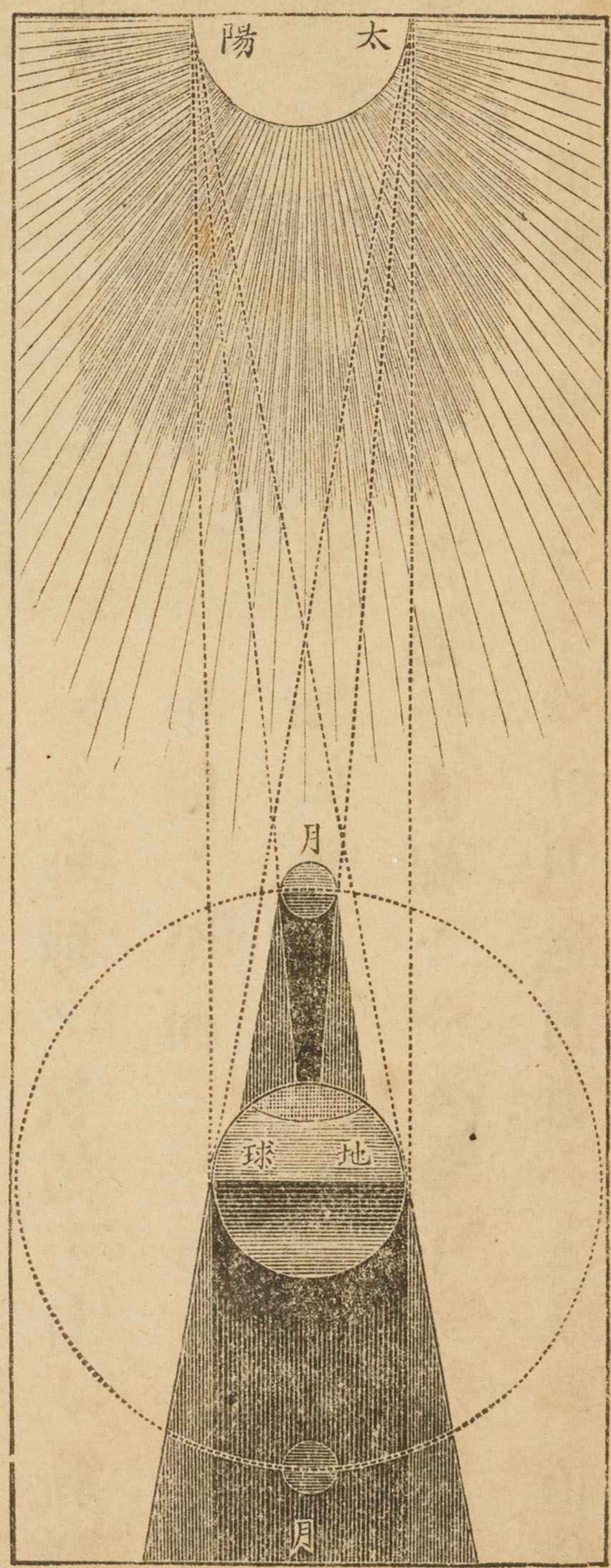
月ハ、自轉シツヽ、ホトンド一定ノ軌道(キドー)ヲ作リテ、地球ノ周圍ヲ運行シ、地球ノ公轉ニシタガヒテ、マタ、太陽ノ周圍ヲ運行ス。月ノ盈虧(ミチカケ)ハ、地球ノ位置ニヨリテ、太陽ニ照サルル月ノ半面ノ、ワレラニ見ユルニ、多少アルニヨルナリ。

ハチ、月ト太陽ト、アヒ對スル間ニ、地球ノアルトキハ、月



ニテモ、太陽、月、地球ハ、普通、一直線トナルコトナシ。サレド、マヽ、一直線ヲナスコトアリ。月蝕(ゲッシック)、日蝕(ニッシック)ハ、コノ一直線ヲナストキニオコル。スナハチ、滿月ノトキ、一直線トナノ照サル、半面、全ク見エテ、滿月トナリ、地球ノ、月ヲ間ニオキテ、太陽ト、アヒ對スルトキハ、月ノ照サル、半面、全ク見エズシテ、新月トナルナリ。」サテ、地球ノ軌道(キドー)ハ月ノ軌道ト同ジ平面ニアラザルガユヱニ、滿月、マタハ、新月ノトキ

ルトキハ、月ハ、地球ノタメニ、光ヲ受クルコトアタハズシテ、月蝕ヲ生ジ、新月ノトキ、一直線トナルトキハ、地球ノ一部ハ、月ノタメニ、太陽ヨリ來ル光ヲサヘギラレテ、日蝕ヲ生ズルナリ。

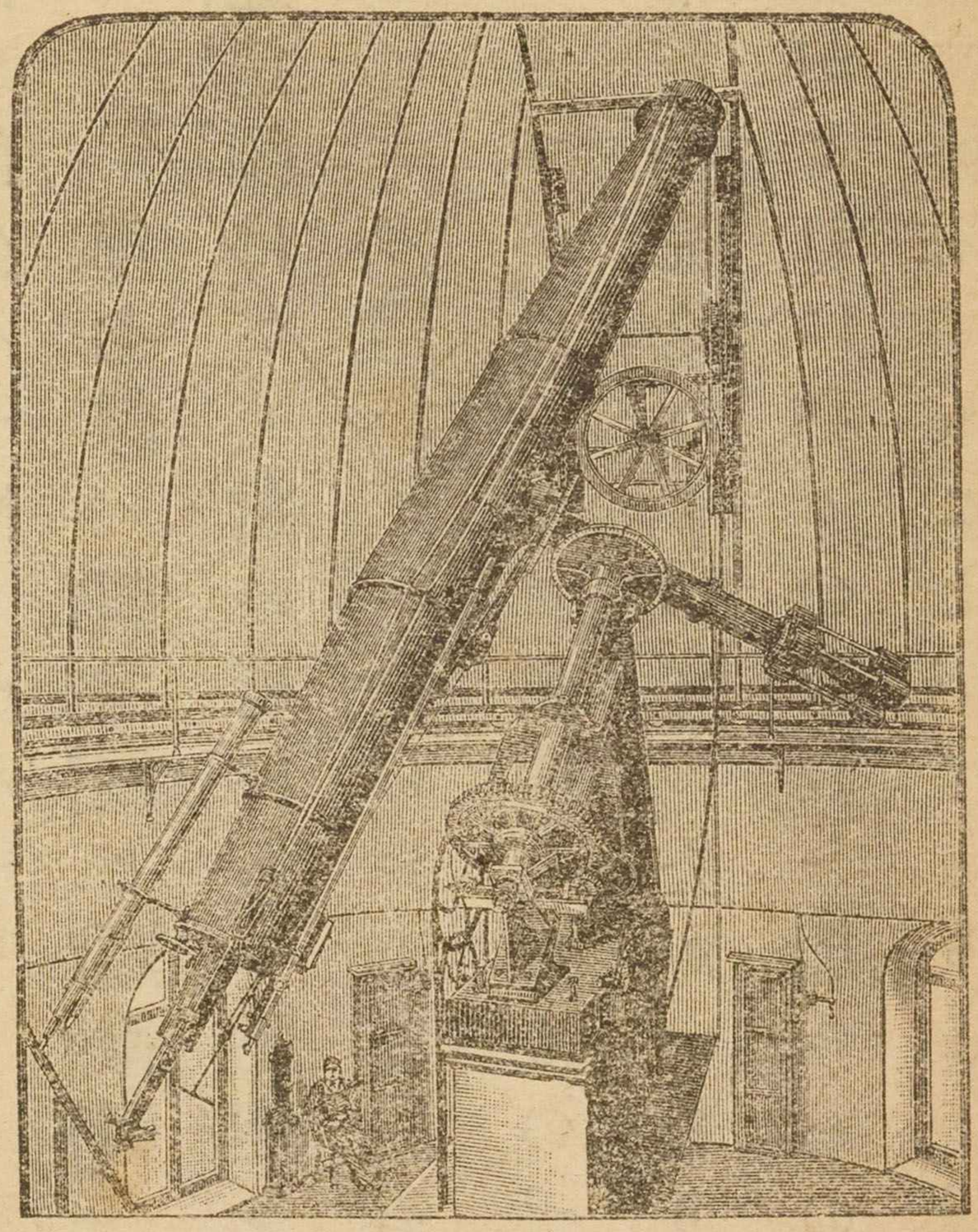


太陽、月、地球ハ、モトヨリ、ソノ他ノ天體モ、タガヒニ、ソノ引力ニヨリテ引合フモノナリ。中ニモ、月ハ、ソノ位置、モットモ、地球ニ近キガユヱニ、ソノ地球ニ對スル引力、ハナ

ハダ强シ。潮ノ滿干ハ、オモニ、コノ、月ノ引力ニヨリテオコルモノニシテ、海水ノ月ニ對スル部分ハ、高マリテ、滿潮トナリ、ソノ反對ノ部分モ、同時ニ、滿潮トナリ、ソノ中間ノ部分ハ干潮トナルナリ。

第七課　望遠鏡と顯微鏡

望遠鏡は、ごく遠い所にある物體を、近い所に見ることのできる器械で、今から、およそ三百年前、おらんだ人、めがねうすが、はじめて發明したものである。はじめは、はなはだ不完全なものであったが、いたりやの星學者、がりれおが、これに種々の改良を加へたので、つひに、星學の研究に使用することができるようになった。がりれおは、こ

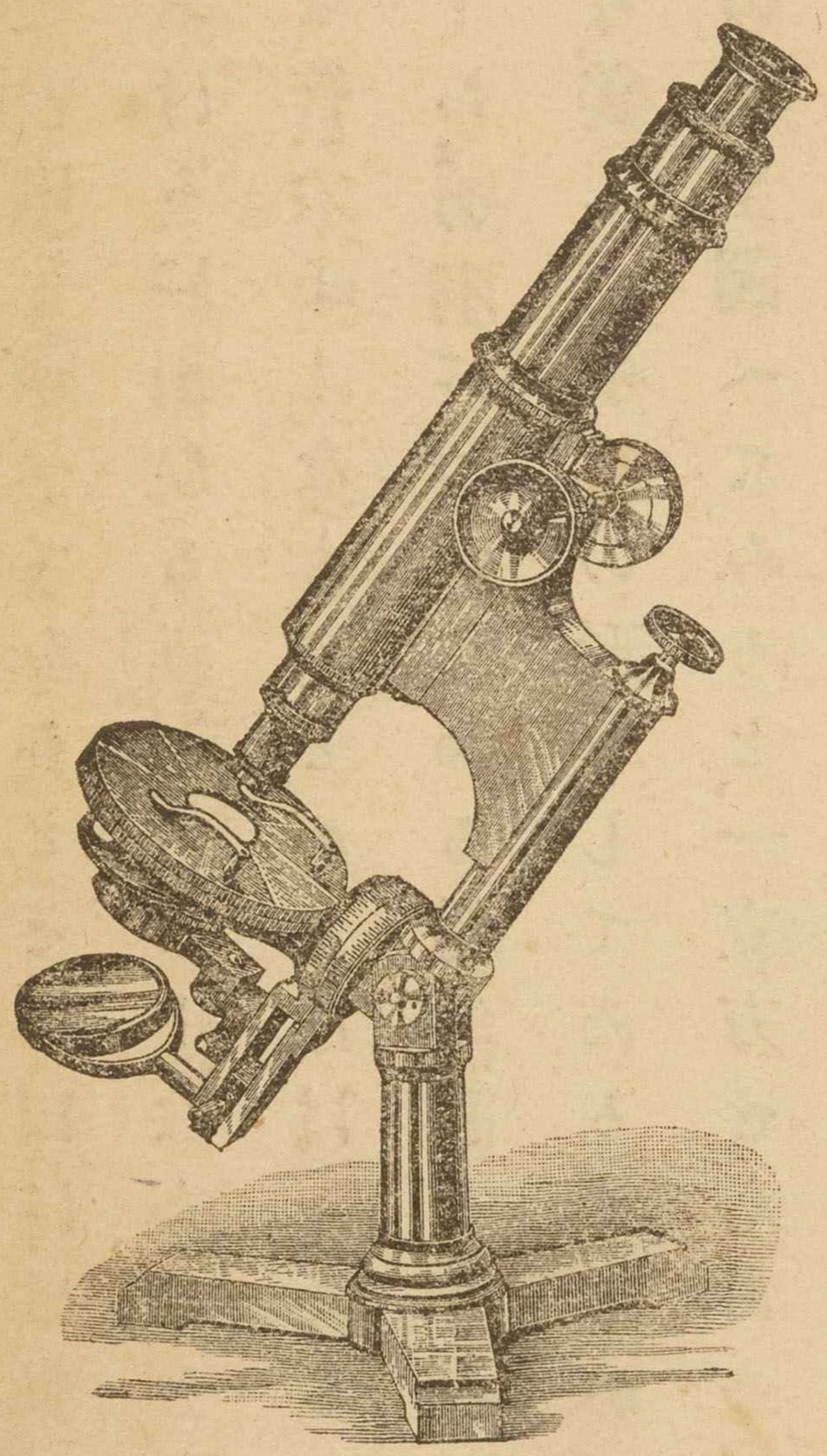


れをもって、天體を觀測して、そのころ、まだ知れてゐなかった、種々の事實を發見した。太陽の表面に、斑點のあること、月の表面に、山のあることなどは、みな、がりれおが發見したのである。

その後、望遠鏡は、ぜんじ改良されて、その構造が精巧になるとともに、その効用も、大いに增してきたが、近時、星

學が、非常に進んで、天體の觀測が、いよ〳〵緻密になり、新しい天體も、多く發見されることになったのは、全く、望遠鏡のおかげである。

望遠鏡とならんで、精巧を爭ふものは顯微鏡である。顯微鏡は、ごく小さいものを、大きく見ることのできる器械で、望遠鏡の發明後、まもなく發明されたよーである。いま、これをもって、



蚊の口を調べてみると、その口には、動物の皮膚に、穴をあけるに用ひる、錐、鋸のよーなものと、血を吸ふに用ひる、管のよーなものとがそなはってゐることがわかり、ちょーちょの羽についてゐる粉を調べてみると、その粉は、みな、美しい羽毛の形をしてゐることがわかる。また、海底の泥を調べてみると、一立方せんちめーとるの中に、およそ十一萬六千の動物が生活してゐることがわかり、粘土を調べてみると、一立方せんちめーとるの中に、およそ百五十億の化石のあることがわかる。近時、細菌學が、大いに開けて、特殊の形質をもってゐるばくてりやが、種々の傳染病の病源となることが明かになったのは、全

く、顯微鏡のおかげである。

第八課　ぴらみっど。

えじぷと太古の文明の
面影(おもかげ)殘るぴらみっど、
ないるの岸のをちこちに、
山かとばかり聳えたり。」

山と見ゆれど、ぴらみっど、
石もてたゝみ築きたる、
方錐形(ほうすいけい)の塔(とう)にして、
大小、およそ七十基。」

「大なる一基築くには、

十萬人の、たゆみなく、
三十年もかゝりてぞ
成しとぐべき。」と、世にはいふ。」
そも、この塔はえじぷとの
國王一家の墓にして、
その墓ごとに、石柩を、
地下のむろにぞをきめたる。」
石柩中のなきからは、
三千年後の今もなほ
くづれ、くきれず、そのまゝに、
みーらとなりて殘るとぞ。」

第九課　すたんりー、りびんぐすとんのゆくへをさがす。(一)

あふりか大陸は、その内地の地理明かならざるがために、暗黑大陸と稱せらるゝこと久しかりしが、今より五十餘年前(ミジカヤミ)、いぎりす人、りびんぐすとんの探檢せしより、その地理、やうやく明かなるにいたれり。

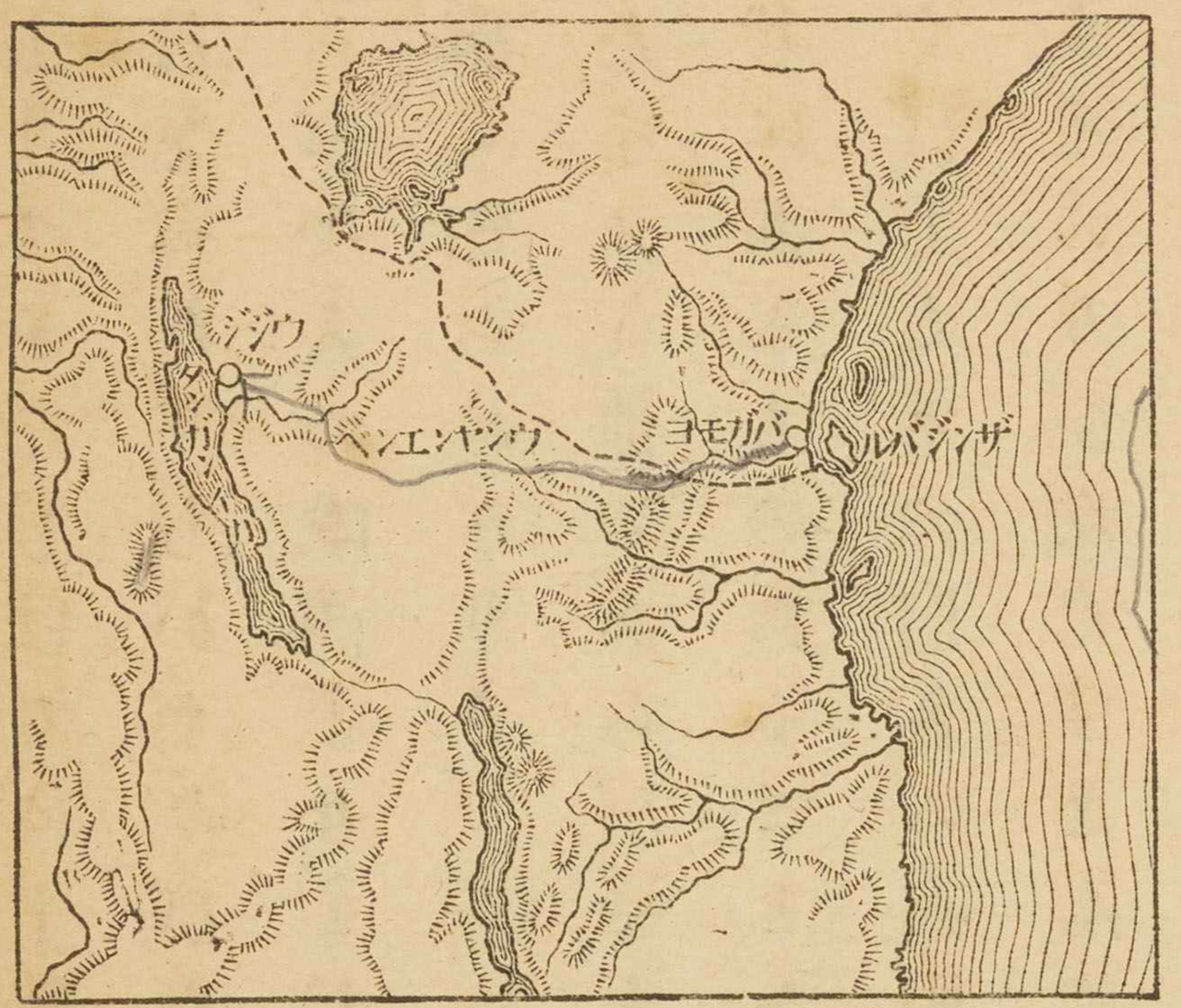
りびんぐすとんの探檢せしは前後三回にして、第一回、第二回には、その消息、時々、よーろっぱ、あめりかの諸國に傳はりしかども、第三回(ヨースタヨリ)には、絶えて聞えざること五年(イツカ)におよびたり。されば、世には、「りびんぐすとんは、すでに死せり。」と思ふものすらあり(サヘアツタ)き。

かゝりしほどに、いぎりすの人、すたんりーは、あめりかの、ある新聞社の依頼によりて、りびんぐすとんのゆくへをさがすとて、あふりかに出發せり。

すたんりーは、ほどへて、あふりかの東海岸に近きぎんじばる島に上陸し、こゝに、多くの日數を費して、種々の準備をなし、さらに、ばがもよにて、人夫をやとひ入れ、隊商（シタク）をつくりて、いよ〳〵、内地にわけ入りたり。

もとより、未開の熱帶地方のことなれば、一行は、しばしば、毒草しげれる藪（やぶ）をわけ、死骸（しがい）横はれる、疫病の流行地を過ぎぬ。毒虫多き野べに宿り、泥深き沼をとほり、水みなぎれる川を渡りぬ。しかのみならず、盜賊の難にあひ

て、多くの貨物を失ひしことあり、酋長（しゅーちょー）の脅迫（きょーはく）にあひて、迂廻せる途をとりしことあり。また、その間には、烈しき疫病にかゝりて苦むもの、死するもの、勞苦にたへずして、進行を怠るもの、暴行をはたらくものなどありて、すたんりーの心勞は、まことに一方ならぎりき。いはんや、すたんりー、みづからも、しばゝ、熱病にかゝりたるをや。



かくて、道、すこしもはかどらざるに、日は、いたづらに過ぎ

去りて、ぎんじばるに上陸せし時より、すでに、二百八十日をへたり。しかも、りびんぐすとんにつきては、途中、あらびや人の隊商より、「うじゝにあり。」と聞きしほかは、何事も知られざりき。

たまく、他の、あらびや人の隊商にあひて、白人の、うじ（ライト）じにあるものあることを聞けり。よりて、すたんりーは、くはしく、その白人の衣服、年齢などをたづねて、いよいよ、そのりびんぐすとんに相違なきことを確めたり。

すたんりーは、大いに勇み立ちしが、かく、道の手間取りては、そのうじゝに到着したらん日の、やがて、りびんぐすとんがその地を去りたる後なるべきことを思ひて、

心のいらだつこと一方ならず、思はずも、「あゝ。汽車はなきか。馬はあらざるか。飛んでいたらん術もがな。」と叫びたりとぞ。されど、ゆくてには、なほ、種々の障礙横はれり。

第十課　すたんりーりびんぐすとんのゆくへをさがす　(二)

泥地は駄馬の足を沒し、尖れる草は人の皮膚を傷つけ、酋長は、多くの物品を求めて、もしきかざらんには、たちまちたゝかひすべき勢なり。かゝる障礙を排しつゝ、やうやく進みく、て、きに、隊商にあひし日より九日目、高き岡の上にいたりて、眼下に、たんがんいか湖を見おろすことをえたり。湖面、鏡のごとくすみわたり、湖岸の

椰子樹、しづかに、影をうつせり。椰子樹の間には、人家隱見せり。あー。この人家ある所こそ、すなはちうじゝなれ。」

すたんりー、すなはち、命を下して、國旗をかゝげ、銃を放たしむ。あめりかの國旗は、高くかゝげられ、銃は、一齊に放たれて、谷より谷にひびきわたりぬ。

うじゝの人々は、これを聞きて走せ來れり。中に、りびんぐすとんの從者あり、進み出でて、英語にて挨拶す。すんりー、この從者より、りびんぐすとんの、なほ、この村にあることを聞きて、大いに喜び、岡を下りて進み行けば、一人の白人、多くのあらびゝや人に圍まれて立てり、色あをじろく、體瘦せ、ひげ、ことごとく白し。頭には、綠色の布

帽子をかぶり、身には、袖赤き上着に、鼠色のずぼんを着けたり。

すたんりーは、いそぎ歩み寄り、帽子をとりて、「御身はりびんぐすとん博士におはきずや。」といへば、かの白人は、面ゑみを浮べながら、帽子をとりて、「しかり。」と答ふ。すなはち、來意を告げけるに、やゝ信ぜざるものゝごとくなりき。されど、本國なる家族、知己より託せられたる、多くの封書を渡しければ、やうやく、その事實を信じて、喜ぶこと限なく、すたんりーを、周圍に立てるあらびや人に紹介して、家に伴ひたり。

さて、二人は座につきて、談話に、時を移しき。りびんぐす

とんは、すたんりーより、よーろっぱにおこりし出來事の數々を聞きて、今さらに、おのれが文明世界に遠ざかれることの久しきを感じ、また、すたんりーは、りびんぐすとんより、その經來りし冒險の數々を聞きて、はじめて、おのれが旅行の困難の、物にもあらぎりしことを悟れり。やがて、樂しく、晩餐をともにせしが、すたんりーは、旅の疲をおぼえければ、まづ、辞して、眠につき、りびんぐすとんは、燈火のもとに、なつかしき家族、知己（ちき）の封書を開きぬ。夜は、しんくとふけわたりて、聞ゆるものは、ただ、たんがんいか湖の波の音と、草むらになく虫の聲々とのみ。

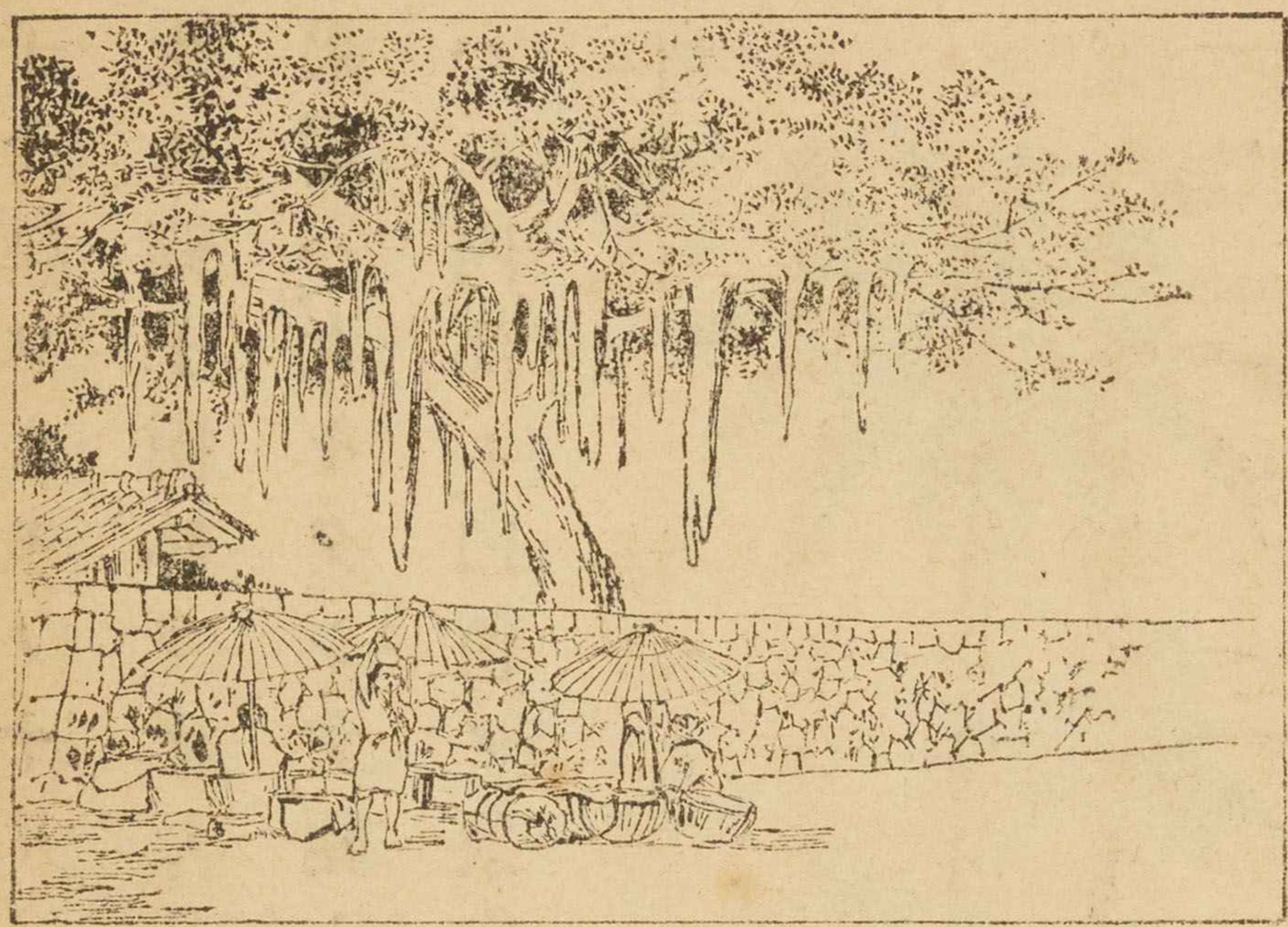
かくて、長き間、二人は、たがひに、語り殘せるところを語り合ひ、また、あたりの地理を探檢せり。されど、すたんりーは、長く留るべからず。すみやかに、事の顚末を報告せざるべからず。よりて、りびんぐすとんにすゝめて、「とも に歸りたまへ。」といふ。されど、「探檢ををふるまでは。」とて承諾せざりければ、りびんぐすとんの、地理學會に宛てたる通信、家族、知己に宛てたる封書を受取り、うんやんえんべまで、ともにいたり、多くの貨物を殘し置きて、つひに、なごりをしき別を告げぬ。かくて、ふたゝび、幾多の困難をおかして、ぎんじばるに着し、ただちに、いぎりすへ向へり。

その　いぎりすに着したる時、人々は、いたる所にて、盛に歡迎し、びくとりや女皇は、とくに、貴重なる物品を贈りて、その勞を謝したりとぞ。

第十一課　熱帶植物。

熱帶地方ノ植物ハ、ソノ種類、ハナハダ多ク、成長、繁殖モ、マタ、キハメテ盛ナリ。コトニ、インド、ジャバノゴトキ、雨量ノ多キ所ニハ、廣大ナル森アリテ、種々ノ、長大ナル樹木、スキマナキマデニ生ヒ茂レリ。シカシテ、ソノ幹枝ニハ、無數ノ蔓(ツル)植物、繩(ナハ)ノゴトクカラミカヽリ、蘭(ラン)類、シダ類、苔(コケ)類ナドモ、トコロエガホニ着生セリ。

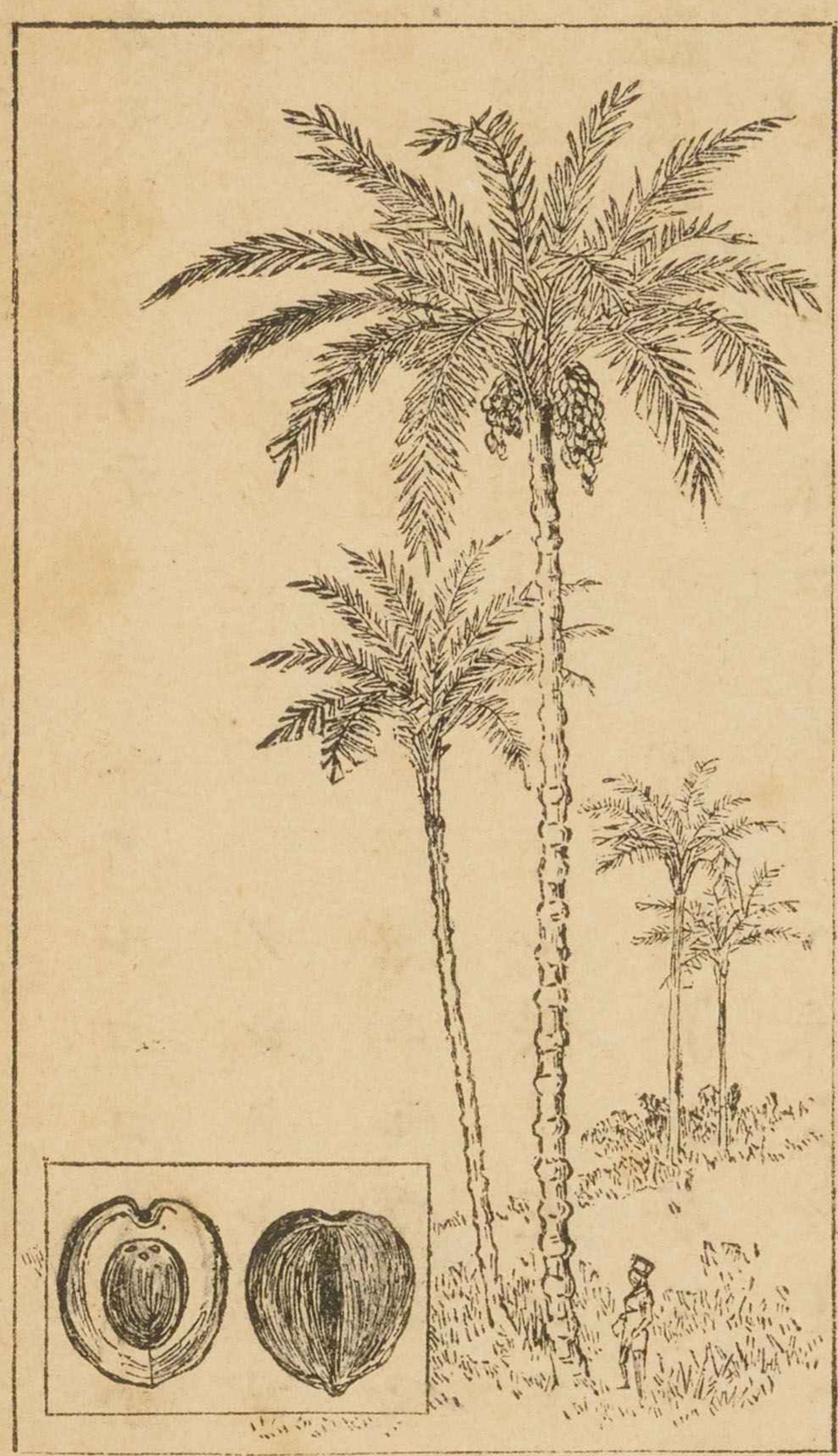
コレラノ樹木ノ中ニハ、幹ノ高キ所ヨリ、大小アマタノ



根ヲ生ジタルモノアリテ、ソノ根ノ大ナルモノハ、アタカモ、柱ヲ立テナラベタルガゴトク、小ナルモノハ紐ヲタレタルガゴトシ。ワガ琉球、臺灣ニモ、ガジマルトイヒテ、カヽル根ヲ生ジタル樹木アリ。

熱帶地方ニハ、椰子樹ノ類、ハナハダ多シ。莖ハ、オホムネ直立シテ、マヽ、百餘尺ニ達シ、葉ハ大ニシテ、コマカク分レ、莖ノ高キ所ヨリ群リ出デタリ。椰子樹ノ類中、モットモ主ナルモノハ、コヽ、椰

子ト稱スルモノナリ。インド、ジャバ地方ノ海岸ニ生ジ、大ナル椰子樹林ヲナセリ。ソノ葉ハ、スコブル大キク、ソノ果實ハ、大キクシテ圓シ。果實ノ外部ハ堅キ殼ニテオホハレ、內部ニ、白色ノ果肉ト、カラリヨキ、乳ノゴトキ液トアリ。コノ液ハ飲用トスベク、果肉ヨリハ、油ヲシボルベク、殼ニテハ、コップ、マタハ、種々ノ器具ヲ製スベ



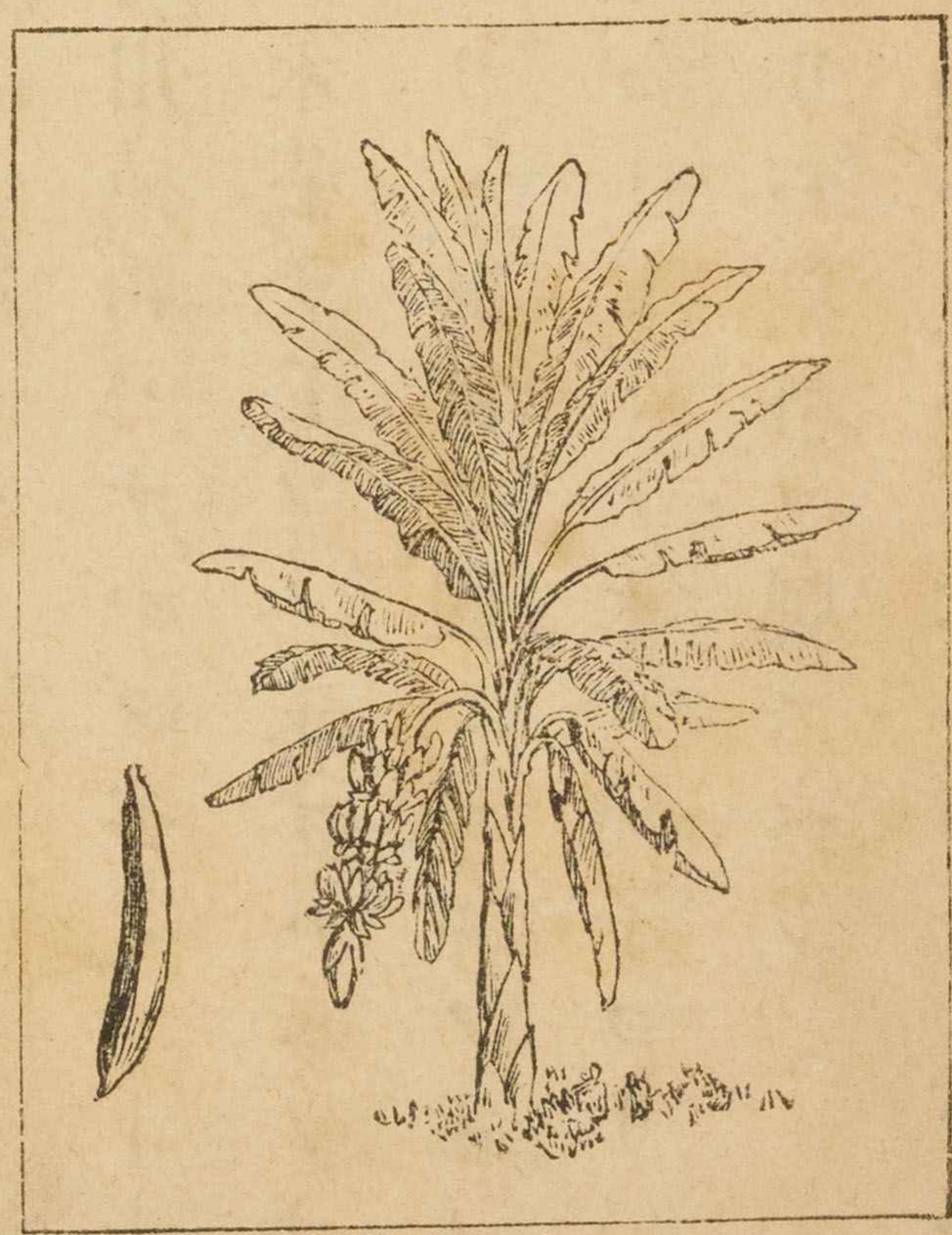
シ。

椰子樹ノ類ニ、マタ、籐トイフモノアリ。インド、ジャバナドニ、モットモ多ク生ジ、ワガ臺灣ニモ生ズ。莖細クシテ、長ク延ビ、森林ノ樹木ニカラミカヽリテ、マヽ、數百尺ニ達スルモノアリ。切リ取リテ籃類ヲ製スベシ。

熱帶地方ニハ、ソノ他ノ有用植物、ハナハダ多シ。サトーキビ、ゴムノ木、コーヒーノ木、藍ナド、ソノ主ナルモノナリ。サトーキビノ莖ノ汁ヨリハ、砂糖ヲ製シ、ゴムノ木ノ幹ノ汁ヨリハ、ゴムヲ製シ、コーヒーノ木ノ種子ヨリハ、コーヒーヲ製シ、藍ノ葉ヨリハ、染料ヲ製スベシ。

マタ、食用果實ヲ生ズル植物、ハナハダ多シ。バナヽ、アナ

ナスナド、ソノ主ナルモノナリ。バナヽハ芭蕉（バシヨー）ノ類ニシテ、廣ク、熱帶地方ニ培養セラレ、ワガ琉球、臺灣、小笠原島ニモ、多ク產ス。アマタノ變種アレドモ、葉ト莖トハ芭蕉ニ似テ、ハナハダ大キク、果實ハ胡瓜（キウリ）ニ似テ、刺（トゲ）ナク、カツ、厚キ皮アリ。果肉ハ澱粉（デンプン）多クシテ、味ヨロシ。



アナヽスハ、莖、ハナハダ短ク、葉長大ニシテ、一所ヨリ群リ出デ、中ニハ、刺（トゲ）アルモノアリ。果實ハ、松ノ實ニ似テ大

キク、赤色ヲオビ、上部ニ、葉群アリ。果肉ハ、味、ハナハダ甘クシテ、香氣強シ。

第十二課　ころんぶす。(一)

今から、およそ四百年前、よーろっぱ諸國は、盛に、外國貿易を營んで、その都市は、大いに繁榮した。ことに、いたりや人は、あじや貿易を一手に占めて、いんど地方に產する、種々の、貴重な商品を、全よーろっぱ諸國に供給してをったのみで、當時、べにす、ぜのあは、その富において、じつに世界の無比であった。

しかし、これらの商品は、たいてい、あらびや人が、いんどし地方から、しりや、えじぷとなどの地方に運んで來て、そ

こに居る、いたりやの商人におろすのであったから、その價は、非常に高かった。したがって、「直接、いんどに行ける航路を開きたい。」といふことは、よーろっぱ諸國いっぱんの希望であったのである。

ぽるとがるの皇子、へんりーは、どうかして、この希望を達しようと思って、當時、あふりか大陸が、どのくらゐまで、南へのびてをるか知れてをらなんだにもかゝはらず、これを廻航しようと企てた。しかるに、こゝに、また、「あふりかを廻航するのよりも、もっと近い航路を開かう。」と企てゝ、思ひがけもない大陸を發見した人があるぞ。これが、すなはちころんぶすである。

ころんぶすは、いたりやくのぜのあの人である。少年のときから、航海に從事し、多年、地中海を航してをったが、三十一二歳のころ、ぽるとがるのりすぼんに移った。りすぼんには、へんりーの建てた航海學校、天文臺（てんもんだい）などがあって、航海術が、大いに進歩してをったからである。

ころんぶすは、りすぼんにあるあひだ、あるひは、あふりかの近海を航し、あるひは、地圖、海圖を作って、生計を立て、もっぱら、地理學を研究した。その結果、つひに、「地球は水と陸とからできてをって、球のよーな形をしてをるものである。もし、東から西へ向って、一直線に航すると、きっと、いんどの東端に達するであらう。また、その間には、めづらし

い島々もあるであらう。」と考へた。この「島々。」といふのには、わが日本をも含んでをる。ころんぶすは、まるこぽろといふ人の紀行文を讀んで、「あじやの東には、ちばんご（シパンゴー）ー（日本）といふ島があって、金銀、財寶（ざいほー）が、到る所に滿ちてをる。」といふことを、かたく信じてをったのである。

ころんぶすの說は、もとより、「ことごとく正しい。」とはいへん。いんどの東端を、よーろっぱの對岸にあるよーに考へ、その間が、ごく近くて、これを航する方が、あふりかを廻航するよりも、はるかに近道であるよーに考へたなどは、全く誤である。しかし、當時、地理學が開けんで、地球の形狀すら、まだ知れてをらなんだときに、ひとり、かう

いふ説を唱へたのは、さすがに、卓見といはねばならん。

第十三課　ころんぶす。(二)

しかし、當時は、ほとんど、ころんぶすの説に、耳を傾けるものはなかった。誰も、ころんぶすを、空想(くうそう)にふけるものと「あぎけって」をった。けれども、ころんぶすは、人々の嘲(あざけり)をかへりみず、ねっしんに、その説を主張し、航路を開かうと企てたが、つひには、多くの負債(ふさい)ができ、その日その日の生計にも困るよーになったので、しかたなく、いすぱにやきころんぶすは、いすぱにやに行っても、なほ、ねっしんに、その企の實行をはかり、その補助をえることにつとめたが、

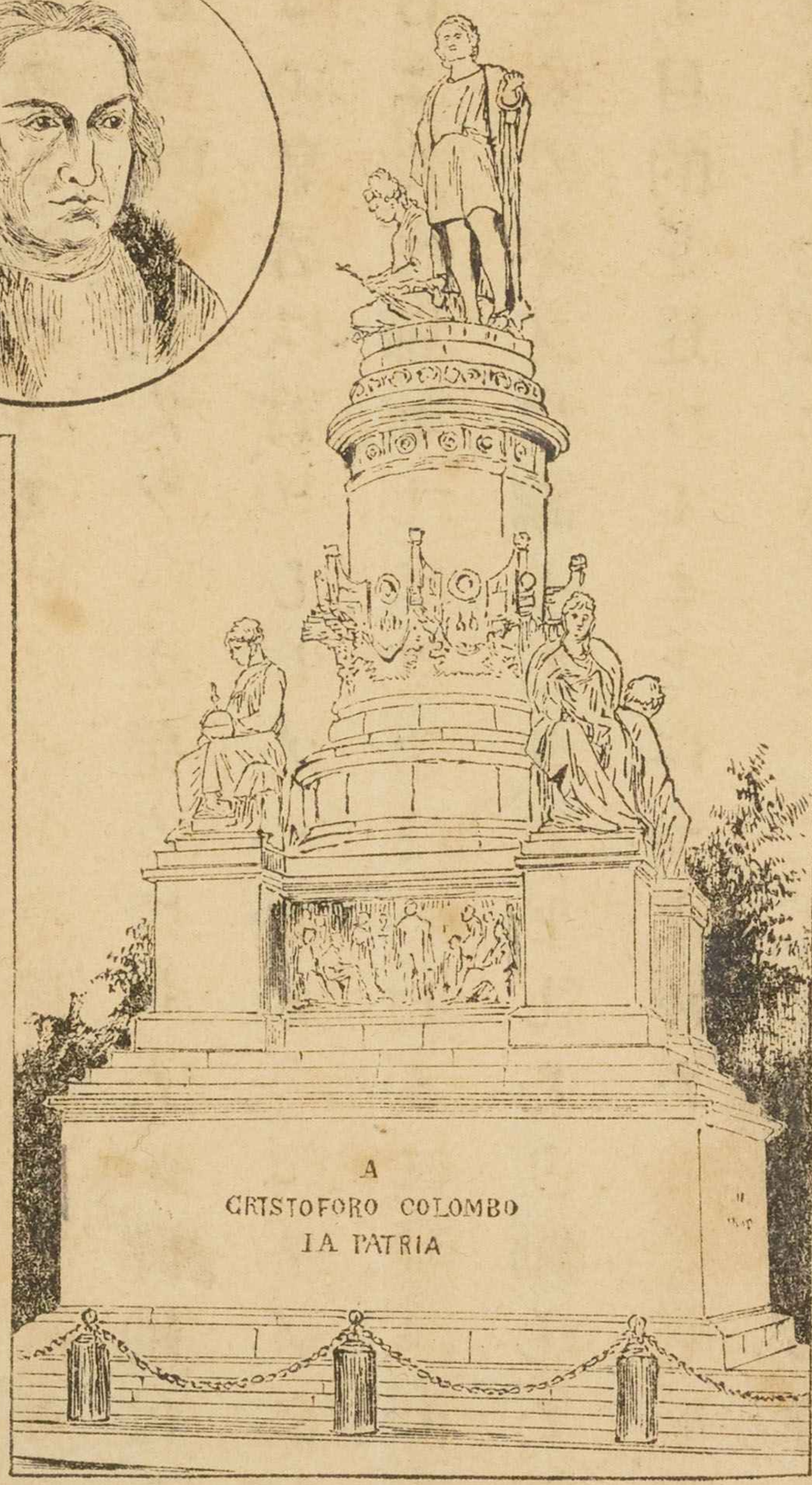
その説、ことに、その、地球の圓いといふ説には、やっぱり、耳を傾けるものがなかった。

このころのいすぱにやの皇后は、いきべらといって、よほど賢明な方であった。ころんぶすは、ある僧の紹介によって、この皇后に謁見し、くはしく、その説、その企を述べた。皇后は、大いに、これを嘉きれて、その航海に要する、いっさいの費用を支辨すべきことを約束された。ころんぶすは、こゝに、はじめて、その企を實行する端緒を開くことができたのである。

西暦千四百九十二年八月、ころんぶすは、勇みに勇んで、いよ〳〵、いすぱにやのぱろす港を出帆した。船は三艘、

乘組は、すべて百二十人であった。

風が、つごーよく吹いて、船は、矢のごとく走って行く。來し方は、もはや、地平線の下にかくれて、行手は限も知れん青海原であ



る。水夫は、恐をいだきはじめて、しきりに、歸航すべきことをせまった。しかし、ころん

ぶすは、ちっともきわがず、まもなく、目的の地に着くべきことを說いて、これをなだめ、晝夜、でっきの上に立って、行手をながめてをる。

かうして、だんだんと進んで行ったが、陸地は、さらにみつからん。水夫は、つひにたへかねて、「ころんぶすを海に投げこんで歸航しよう。」ときへはかるようになった。しかし、ころんぶすは、諭したり、おどしたり、勵したりして、たえず、目的を達することにつとめた。

ある日、「今、根こぎにされたか。」と思はれる葦と、果實のついてをる枝とが船に流れ寄った。斧のあとのある板、刃物で彫刻した杖なども、波のまにまに流れて來た。ころん

ぶすはもとより、水夫らは、やうく、陸地の近くなったことを知って、大いに勇みたった。

その夜、ころんぶすは、行手はるかに、一點のともしびを認めたが、夜明ごろ、まっきに進んでをる船からどんと一發、砲聲が聞えた。新陸地は、つひに發見されたのである。時は十月十二日、ころんぶすがばろす港を出帆してから、七十一日めである。

第十四課　ころんぶす。(三)

美しい綠色の島は、今、眼前にあらはれた。水夫は、狂せんばかりにうち喜び、みな、ころんぶすの周圍に集って、これまでの無分別を謝した。畢生の大希望を達したころん

ぶすの喜は、はたして、どんなであったであらうか。

ころんぶすは水夫を隨へ、上陸して、その新陸地のいすばにや皇帝の領地であることを宣言(せんげん)した。その陸地は「ぐあなはに」といふ島であったが、ころんぶすは、新に「きん、きるばどる」といふ名をつけた。

ころんぶすは、ついで「きゅーば」「はいち」などをも發見した。

そして「きん、きるばどる」や、これらの島々を、かねて考へてをったとほり、いんどの一部であると信じたので、その土人に、いんど人といふ名をつけた。この名は、誤った考でつけられたものながら、今、なほ用ひられてをる。

ころんぶすは、この發見の次第を報告するために、いった

ん。いすばにやに歸航した。そのばろす港に着いたとき、歡迎の人々から起った喝采は人を聾にするばかりであった。ろんぶすは、やがて、皇帝と皇后とに謁見したが、皇帝と皇后とは、大いに喜んで、貴い位や特權を與へて、その名譽を表彰された。

ろんぶすは、この後、第二、第三、第四回の航海をした。第二回には、多くの島々を發見し、第三回には、南あめりかのおりのこ河口を探檢した。しかし、これらの航海は、ろんぶすにとっては、みな、不幸な航海であった。ろんぶすについて渡航したものは、思のほかに、金銀、財寶のえられんばかりか、かへって、新殖民地の基礎を固めるために

勞働せねばならなんだので、ころんぶすのことを、あしざまに、本國に報告し、本國から派遣された使節は、ころんぶす（コロンブス）を、鐵の鎖（くさり）でしばって、本國に送り歸した。この鐵の鎖は、いきべらのなきけによって解かれ、ころんぶすは、さらに、第四回の航海をすることを許されたが、航海中、難船して、命からがら歸って來た。

ころんぶすは、六十歳のとき、いすばにやで死んだ。その子は、遺言によって、かつてしばられた鐵の鎖（くさり）を、屍（しかばね）とともに、墓の中に埋めた。ころんぶすの晩年の歷史は、じつに、涙の歷史である。

ころんぶすの死に先だつこと數年、いたりやのあめり

ごとといふ人が、數回、南あめりかの海岸を探檢して、これに關する、くはしい紀行を公にした。ころんぶすの發見した新大陸は、このあめりごの名によって、つひに、あめりかといはれることになった。

第十五課　ないやがら瀑布。

ないやがら瀑布はあめりか第一の大瀑布にして、あめりか合衆國の東北部にあるないやがら河にかゝれり。すぺりおる、みしがん、ひゅーろんの、三大湖の水、ことごとく、えりー湖に注ぎ、えりー湖の水、さらに、ないやがら河となりて流れ、河中のごーと島に到りて、分れて、二派となり、こゝに、二大瀑布をなす。これ、すなはち、ないやがら

瀑布にして、島の左にあるものは、かなだ國に接せるがゆゑに、かなだ瀑といひ、島の右にあるものは、あめりか合衆國に接せるがゆゑに、あめりか瀑といふ。

あめりか瀑は、幅千六十ふぃーと、高さ百六十七ふぃーとあり、かなだ瀑は、幅三千十ふぃーと、高さ百五十八ふぃーとあり。かなだ瀑は、一に、ほーす、しゅー瀑といふ。馬蹄鐵瀑の義にして、瀑の形狀によりて名づけたるなり。

そもそも、ないやがら河は、長さ、わづかに三十六まいるにすぎずして、河口の、河源より低きこと三百三十ふぃーとなりといへば、水勢の、いかに急なるかを知るべきに、瀑布にては、水流、およそ、その半の高さある絶壁より、一

躍して、深淵に直下し、その水量、一分間千五百萬立方ふぃーとにおよぶといへば、その勢の、いかに猛烈なるかを知るべし。

きれば、その響、萬雷の、一時に落つるがごとく、水煙もーもーとして、白雲の上るがごとし。天氣うらゝかなる日は、日光水煙に映じて、七彩の虹をあらはし、美觀限なしといふ。

この瀑布は、ごーと島の、周圍の崖よりも見るべく、河の兩岸よりも見るべし。また、小蒸氣船にて、その近傍に到りても見るべし。この瀑布を見んとて、各地方より來るものは、年々四十萬人の多きにおよぶ。

河の右岸に、あめりか合衆國の町、ないやがら、ふぉーるすあり。この町は、もと、遊覽の客のために成れるものなれども、近時、河流を利用して、一大工業地たらんとせり。すなはち、瀑布の上の右岸より、短き運河を掘り、それに續けて、町の地下に、およそ一まいるのとんねるを穿ちて、水流を、瀑布の下の右岸に導き、その運河の落口に、水車を裝置して、十五萬馬力ほどの水力を得るなり。しかも、瀑布の水量は、少しも、減じたるがごとく見えずといふ。

第十六課　地震。

昔ノ人ハ「地下ニ、大鯰（ナマズ）スミテ、ソノ頭ヲフリ、尾ヲ動カス時ハ、地震、タチマチ起ル。」ト考ヘタリ。サレド、今ハ、學問、大

イニ進ミテ、カヽル、愚ナル説ニハ、耳ヲ傾クルモノモナシ。

地震ノ原因ニ、三ツアリ。イマ、ソノ原因ニヨリテ、火山地震、ジスベリ地震、陥落(カンラク)地震ノ三ツニ分ツ。

火山地震ハ、多クハ、火山ノ破裂ニヨリテ起ル。寶永(ホーエイ)四年、富士山ノ破裂セシ時ニ起リタルモノ、明治二十一年、磐梯(バンダイ)山ノ破裂セシ時ニ起リタルモノヽゴトキ、コレナリ。

火山地震ハ、地盤震動ノ區域、オホムネ狹少ナルヲツネトス。

ジスベリ地震ハ、地殼ノ一部ノ、急ニ移動スルニヨリテ起ル。明治二十四年、濃尾(ノービ)地方ニ起リタルモノ、明治二十

九年、奥羽地方ニ起リタルモノヽゴトキ、コレナリ。ジスベリ地震ハ、火山地震ニ比スレバ、震動ノ區域モ廣大ニ、強サモ激烈ナルヲツネトス。

陷落地震ハ、地下水ノ、物質ヲ溶解シ去リテ、ソノ所ニ、空所ヲ生ジタル時、ソノ上部ノ地盤ノ陷落スルニヨリテ起ル。ワガ國ニハ、陷落地震ノ起リシコト、ハナハダ少シ。

地震ノ原因ヲナセル地ヲ震源トイフ。火山地震、陷落地震ノ震源ハ、オホムネ、小區域ニ止マレドモ、ジスベリ地震ノ震源ハ、多クハ、長キ線ヲナス。

地震ノ強弱ハ、震源トノ遠近ニ關スルコトモチロンナレドモ、マタ、ソノ地ノ地形、地質ニモヨルモノナリ。スナ

ハチ、地盤ノ強固ナル土地、谷、マタハ、堀割ヲモッテ隔テラレタル土地ナドハ、震動、イッパンニ弱ク、地盤ノ軟弱（ナンジャク）ナル土地、高臺（タカダイ）ニ接セル低地ナドハ、震動、モットモ強シ。

地震ノ搖（ユ）リ方ハ、キハメテ複雜（フクザツ）ナルモノナレドモ、コレヲ、上下ノ運動、スナハチ上下動ト、横ノ運動、スナハチ水平動トニ分ツコトヲ得ベシ。震源ニ近キ地ニアリテハ、上下動烈シク、コレヲ遠ザカルニシタガヒテ、ヤウヤク、水平動多シ。上下動ハ、コトニ恐ロシキモノニシテ、今ヨリ、オヨソ百二十年前、イタリヤノ、カラブリヤトイフトコロニ起リシ大地震ニハ、山岳、上下ニ動搖シ、アマタノ人家、飛ンデ、高所ニ移リシコトアリ、マタ、ワガ安政ノ大

地震ニハ、物干臺ニ居タル人、トツゼン、高ク、空中ニハネトバサレタリトイフ。

地球上、地震ノ多キ所ハ、太平洋沿海ノ地方ト、地中海沿海ノ地方トナリ。コトニ、ワガ國ハ、モットモイチジルシクシテ、古來、大地震ト稱セラルヽモノ三百八十餘回アリ。ソノウチ、安政二年ノ江戸大地震ニハ、死者十萬餘人ニオヨビ、明治二十四年ノ濃尾大地震ニハ、死傷者二萬餘人、家屋ノ破損二十萬戸ニオヨビタリ。

第十七課　忘れがたみ。(一)

安政二年十月二日、時刻は夜の亥の刻かとよ。

「地裂け、天落つるか。」とおどろかれたり。

みるく、百萬の人家、倉庫、神社、佛閣、倒るゝあり、崩るゝあり。家にしかれ、瓦に打たれて、死せるはいくばくなるやを知らず。

一時に落ち來る千萬の瓦、一時に崩るゝ百萬の家の響は、泣き叫ぶ老若男女の聲に和して、たとふるに、ものあらざりけり。

しばらくして、地の震、やゝをさまり、崩るゝ家の響薄らぐに隨ひ、あとに殘りて聞えしは、親を呼ぶ子の聲なり、子を尋ぬる親の聲なりけり。

近くにも、遠くにも、ことにあはれに聞えしは、しだいくに、細くなる、「助けてくれ。〳〵。」の聲な

りけり。

ことわりなるかな。　梁(はり)に壓(お)さるゝものあり、柱にはさまるゝものあり、土に埋められるゝものあり、壁にしかるゝものありて、きなきだに、苦むものは多かりしに、地の震ひ動くこと、まだ、やむか、やまざるに、四方の天は、一面に、しだいしだいに、あかるくなりて、きながら、晝のごとくになれるは、所々、方々のつぶれ家より、火の炎(えん)と燃え出でて、焰(ほのほ)が天を焦せるなり。

家につぶされて、身は動かず、もだえ苦む、そのところに、燃え來る火のために、煙にむせび、熱き

にたへかね、　ののがれんとしてあせれども、　ののがるゝことは叶はねば、聲を限りに叫べども、助けに來る人はなし。無慚といふも餘ありけり。」その夜、わづかの時の間に、死したる人の、その數は、幾萬なるかを知らざるが、中には、いともあはれなる　死にぎまのものも多かりけり。運强くして、不思議にも、その身は萬死をのがれしも、親、兄弟の無慚の死を、そぞろに悲むものもありけり。

夫婦にてありながら、夫は梁に壓しつぶされしも、妻は、ねだのぬけたるために、下に陷り、不思

議にも、命を助かりたるもあり。

梁にしかれたる、わが妻を助け出さんとあせれども、力及ばざる、そのうちに、あたりは、一面、火になりて、みすゝ、妻のやけ死ぬのを、殘して去れる夫もあり。

「妻子はいかがなしつる。」と、崩れ家を取除け見れば、こはいかに。妻は、穴藏に、なかば埋まり、片手には、をきなごの足をつかみ、恨めしげなる顏つきにて、色青ぎめて死せるもありたり。

きれば、この夜の、不運のものには、あるひは、祝の席において、あるひは、悲の最中に、寐耳に水に

死せるなど、語るもあはれなるものもありけり。

第十八課　忘れがたみ。(二)

これらは人の身の上なり。われにも、この夜の話あり。父は、その夜は、とまりの番にて、家を守り、三人の子を護りしは母なりけるが、上なる子二人は、母の左右に寐ね、末なるは乳母に抱かれて、枕邊に臥し居たりき。

有るまじきことなれども、「すは。地震よ。」といふとひとしく、乳母は抱きし子を捨てゝ、われのみ、外へと逃げ出でたり。母は泣く子を抱きあげ、右と左に寐たる子をゆり起きんとあせりしか

ども、をきなごをかゝへし身にて、大浪にゆらるゝごとく動きつゝ、片手で起す左右の子は、冬の夜の寐入ばなにて、起せどもく、いっかな、いっかな起くればこそ。

うつゝにて、母に連れられ、外へ出でたる、その時は、地のゆるゝのもやみしあとにて、四方の天は、火事のために、すでに、まっかになりゐたり。

じつに、危かりしは、われく、親子の命なりけり。

そも、安政の地震には、水地なる舊家のつぶれぬものはまれなりしが、われらが住ひしふる家も、潰れぬばかりに傾きたりけり。

今においておもひ起すも、身の毛のよだつはこの夜のことなり。この地震にて、われらが家の、もしや、潰れもしたらんには、わが兄弟は死したりとも、誰をも恨むべきならねど、もし、母が死したらんには、われらが罪にてありしならん。」

さりながら、この夜、もし、われら、親子が死したるならば、何ゆゑ、母が死せしかは、世に知る人はなかりしならん。生くべかりしを、子のために、死せしなりとは、誰か知るべき。

今も、なほ忘れぎるは、久しき昔の、この夜のことなり。じつに、ありがたきものは母の愛なり。母

は、その身の危きをも　顧みずして、一心に、子を助けんとなしゝものなり。

じつに、深きは親の恩なり。　われに、今日あるは、かゝる愛をもって育てくれたる　母ありたるがためなり。　われは、みづから知らぎれども、　わが母は、この夜のごとくに、　その身の命の危きをも顧みずして、われ〳〵の　身をば護りてくれたるは、　幾度なりしか知れぎるならん。

この夜のことは、なき母の、　われには、忘れがたみなり。　この夜、われ〳〵、親子より、　運つたなくして死せるものには、　助かるべきを、子のゆゑに、

死したる母はいくばくなるらん。

この夜のことは、なき母の、われには、忘れがたみなり。この夜のごとき天災の、もし、けふの夜に起らんには、助かる命を、子のために捨てんとする母親は、いくばくなるか知れざるならん。

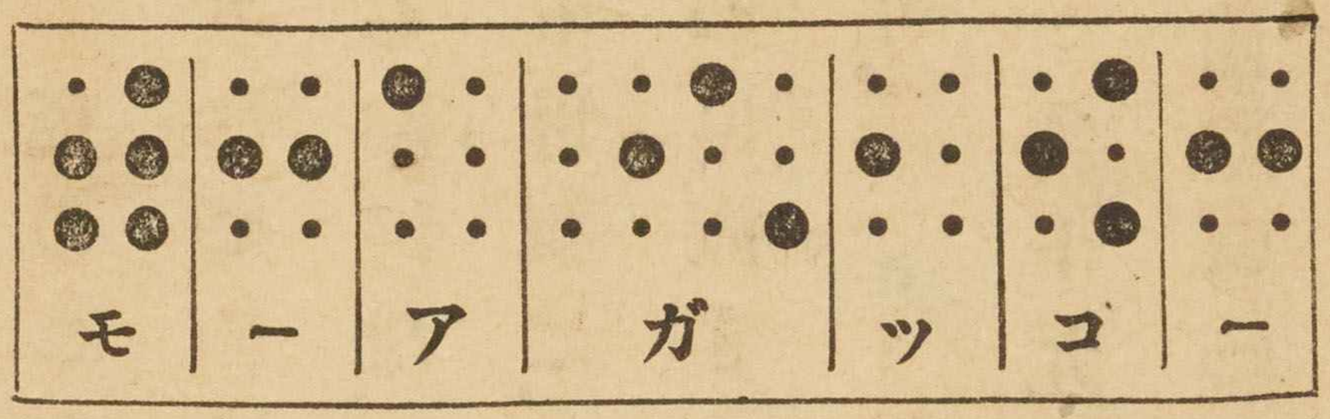
すじつに、深きは親の恩なり。忘れがたきは母の愛なり。

（文學博士外山正一原作節錄）

第十九課　手紙。

前略。盲啞學校にては、いかにして、盲生に讀、書を教へ、また、啞生に發音を教ふるかとの御尋に對して、左に、その概略を申し上げ候。

まづ、盲生に讀、書を敎ふるには、訓盲字といふものを用ひ候。訓盲字は一箇より六箇までの凸點より成り立ち、その點の數と位置とによりて、假名、または、數字の符牒となりをるものに御座候。



上圖にて、その大體を御承知下されば度候。盲生にこの訓盲字を讀ましむるには、厚き洋紙の面につき出したる訓盲字を、指頭にてさぐらしめ、また、書かしむるには、點字盤とて、金屬製の板の面に、多くの凹點あるも

の丶上に厚き洋紙をのせ、金屬製の筆にて、紙上より、點字盤の凹點をつき出きしめ候。

次に、啞生に發音を教ふるには、教師、啞生とともに、大なる鏡（かがみ）の前に立ちて發音し、口の開閉、唇、舌などの動き工合を鏡に寫して、これにまねしめ候。大なる鏡なき場合には、各啞生に、一の、小きき鏡を持たしめ候。

きて、盲生、啞生の教育は、常人のとくらべて、低き程度にあることもちろんに候へども、とにかく、かゝる不幸のものまで、普通教育を受くることを得候は、明治聖（せい）代（だい）の恩澤と存ぜられ

御用
雪降りて
あかしく來た
みそさい

候。まづは、御返事まで、かくのごとくに御座候。

三月十日　服部文雄

長谷川誠殿　敬具。

第二十課　外交。

ワガ國ハ、古代、盛ニ、支那、朝鮮ト交通シ、室町幕府ノ末カラハ、ポルトガル、イスパニヤ、オランダ、イギリスナドノ西洋諸國トモ交通シテヰタガ、德川家光ノ時、西洋人ガキリシタン宗ヲヒロメテ、國ヲ危ウスルトイフノデ、支那、朝鮮ノホカニハ、タダ、オランダバカリニ、貿易ヲ許スコトニシタカラ、外交ハ、ニハカニ振ハナイヨーニナッタ。

シカルニ、今カラ、オヨソ五十年前、江戸幕府ガ、諸外國ト、假條約ヲ結ビ、港ヲ限ッテ、貿易ヲ許シテカラ、外交ハ、マタ、ダン〳〵ト興リ、明治維新後、廣ク、知識ヲ世界ニ求メルコトニナッテカラ、ツヒニ、現今ノヨーニ、盛大ヲ極メルコトニナッタ。現今、我國ト交際シテヰル國ハ、アジヤデハ、清、韓、シャムノ三箇國、ヨーロッパデハ、イギリス、フランス、ドイツ、イスパニヤ、ポルトガル、スエーデン、ノルエー、スイス、ベルギー、オランダ、デンマルク、イタリヤ、オーストリヤ、ハンガリー、ギリシヤノ十四箇國、北アメリカデハ、アメリカ合衆國、メキシコノ二箇國、南アメリカデハ、ペルー、ブラジル、アルゼンチンノ四箇國、アフリカデハ、コンゴ

皆デ二十四國

ーノ一箇國デアル。

サテ、國ト國トガ交際スルトキニハ、通商、航海ニ關スルコト、海關稅ニ關スルコト、居留民ニ對スル法律ノ適用ナドニツイテ、タガヒニ、條約ヲ結ブノガツネデアル。ワガ國モ、コレラニツイテ、諸國ト、條約ヲ結ンデヰル。ソノ條約ハ、多クハ對等デアルガ、清、[redacted]、シャムトバカリハ不對等デアル。ワガ國ニ居留シテヰル、不對等國ノ國民ガ訴ヘラレタトキニハ、ワガ政府ノ官吏ガ、タダチニ、コレヲ處分スルケレドモ、カノ國ニ居留シテヰル、ワガ國民ガ訴ヘラレタトキニハ、カノ國ノ政府ノ官吏ハ處分スルコトガデキナイデ、ワガ政府ノ官吏ガ、ジブンデ、コレヲ

處分スル。コレハ、カノ國ノ法律ガ不完全デアッテ、ワガ國人ニソノ裁判ヲ受ケシメルノガ、ハナハダ不安心デアルカラデアル。

條約ヲ結ンダ國ヲ條約國トイフ。條約國ニハ、タガヒニ、外交官ヲ駐劄(チュウサツ)サセテ、外交ノコトヲ掌(ツカサド)ラセル。外交官ノウチデ、ソノ駐劄スル國ノ主權者ニ對シ、自國ノ主權者ヲ代表スルモノハ、特命全權大使、特命全權公使、辨理公使ナドデアル。大使、公使ノホカニ、條約國ノ、主要ナ土地ニ居テ、本國人ノ商業ヲ保護シ、カツ、ソノ危難ヲ救フコトナドヲ掌ルモノガアル。コレハ領事デアル。ワガ國ト各條約國トノ間ニハ、マダ、特命全權大使ヲ駐劄サセタ

コトハナイ。

條約國ニハ、ワガ國民ノ居留シテヰルモノガ少クナイ。ワガ國ニモ、カノ國民ノ居留シテヰルモノガ多イ。ワガ國民ノ、條約國ニ居留シテヰルモノハ、ミナ、丁寧、親切ニ待遇サレテヰル。ワレラモ、ワガ權利ヲマゲナイカギリハ、丁寧、親切ニ、カノ國民ヲ待遇シ、大國民ノ、寛大ナ心ヲ示サナケレバナラナイ。コトニ、公使ナドハ、前ニ述ベタヨーナ資格ノアルモノデアルカラ、深ク、コレニ對スル擧動ヲツヽシミ、ケッシテ、無礼ヲ加ヘルヨーナコトガアッテハナラナイ。

をはり。

72433

国立国語研究所
1000605392

明治三十七年三月二十八日　印刷
明治三十七年三月二十九日　發行
明治三十七年五月十一日　翻刻印刷
明治三十七年五月十四日　翻刻發行

明治三十七年五月七日
文部省檢査濟

著作權所有

高等小學讀本六
定價金八錢

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　前川善兵衛
大阪市東區南久寶寺町四丁目十九番屋敷
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所　日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門町拾六番地

. 0
24